



竹塚 直久氏

# フォーカス

「世界の文字の中でも携帯電話などの画面上で表現するのが難しいのが漢字。いかに読みやすくできるか」。1988年にフォントメーカー「リムコーポレーション」を起業、ひたすらこのテーマに取り組んできた。今では国内携帯電話の7割に採用されている。

「正確な漢字が読みやすいとは限らない」。携帯電話では画数が多いと黒くつぶれたように見える。「雨」であれば、「」の部分省略したり、文字の線を薄くしたりするなど、一手間加えなければいけない。

## 高齢化進むアジアに照準

人海戦術で1文字ずつ作るマンパワーはない。そこで人工知能を活用し、フォントをソフトで作らせる方法を思いついた。「一部を省略して線の間隔をそろえる」といった複数の条件を決め、線の太さや丸みなど読みやすい法則を一つ一つ積み上げた。そして米粒に写経できるほど小さな文字を表示可能にした。

フォントとの出合いは印刷会社に勤務し、取扱説明書などの組み版を作っていたとき。「同じ文字でもフォントでがらりと印象が変わる」と驚きの連続だった。紙では多くのフォントがあったが、デジタルはわずか。「電子機器の普及で需要が広がる」。当時描いていた読みが当たった。

高齢になると文字が読みにくくなる。高齢化が進むアジアでもチャンスが広がり、中国の企業と交渉が始まっている。タブレット端末や電子書籍などに向けて、日本発のフォントで市場の席巻をもくろんでいる。

「たげつか・なおひさ、56歳

## 音楽がいとガイド

- ジョニー・ウィンター (写真左から2人目) 13~15日午後7時、青海・ZEPP TOKYO。50年近いキャリアの米ブルースギタリストが初来日。8000円(ドリンク代別500円)。M&Iカンパニー ☎03・5453・8899。
- NHK交響楽団 10日午後4時、上野・東京文化会館。東日本大震災の被災者支援のためのチャリティー・コンサート。ズービン・メータ指揮でベートーベン交響曲第9番。1万2000~2万円。東京・春・音楽祭実行委員会 ☎03・3296・0600。
- 新国立劇場「ばらの騎士」 10、13、16、22日午後2時、19日午後6時、初台・新国立劇場 ☎03・5352・9999。シュトラウス作のオペラ。全3幕。指揮はマンフレッド・マイヤー・ホフナー、新日本フィルハーモニー交響楽団。出演はアンナ=カタリーナ・ペーンケ、フランツ・ハヴラタラ。7350~2万3100円。
- 日本テレマン協会第198回定期演奏会 15日午後7時、上野・東京文化会館小ホール。延原武春指揮、高田泰治のフォルテピアノで、モーツァルトのピアノ協奏曲第8番・第11番・第14番。前売り3500円。日本テレマン協会 ☎06・6345・1046。
- 高橋望 (ピアノ) 16日午後5時、江戸川橋・トッパンホール。シューベルト「楽興の時」などを演奏する。3000円。スピカ ☎03・3978・6548。



さらりーまん

生きざまがく 生態学

幸田 真音

今回の震災で日々伝えられる被災地の現状を、胸がつぶれる思いで見守っている。

福島原発の状況からも目が離せず、だからといって、なんの役にも立てないわが身をふがいなく思いながら、ひたすら、一日も早い収束を祈るばかりだ。

「頑張ってください」と安易に口にするのは、被災していない者のエゴではとも思う。

そんななかで、なにより驚かされるのは、みずからも被災者でありながら、それぞれの持ち場で懸命に職務をまっとうしている現場の強さである。

## 相手に譲る誇り高き力

地震直後にボランティアで被災地にはいった若い女性看護師のブログを読むと、報道では伝わらない生々しい現実が身体が震えてくるが、一方で極限状態に置かれた人間はかくも優しいのかと、胸が熱くなる。

ある大手携帯電話会社では、地震の翌日に社長みずからヘリコプターで被災地へ飛び、すぐさま復旧工事のロードマップが描かれたそう。津波で失った施設の再建計画を、被災者のためにと短期間に縮めた社長の心意気に、現場の社員は無理を承知で素直に従ったのである。

また、某電気機器メーカーでも、地震発生の翌日には数億円もの義援金を用意し、緊急支援助資として万単位の懐中電灯や乾電池を被災地に送ったという。さらには海外から追加の商品を取り寄せ、採算度外視で空輸したのだが、相手先は無償提供を申し出てくれ、航空会社も無償で運んでくれたとのこと。

危機管理の必要性など、平時にはなんとも言えるのだろう。だが、本当の危機に遭遇したときにこそ、人は真価が問われるものだ。

なにを優先させ、なにを後回しにできるのか。自己の利を捨て、相手に譲れる誇り高き現場の底力が健在である限り、東日本復興への道のりは、決して遠くはないはずだ。

(作家)